

第1話 VRで女の子になって

とろつとろに気持ちよくされちゃう話

VRゲーム『トレインプレイ』。

痴漢体験を超リアルに再現するということで、一部で物議を醸しながらも、プレイヤーの性別を問わずアクセス可能になった問題作だ。そのソフトをサクがダウンロードしたのは、ほんの興味本位だった。プレイキャラクターは現実世界の性別に左右されない。

——女の子の身体で触られるってどんな感じなんだろうな？

半分は冗談、半分は興味本位。そんな気持ちだった。

インスタールを終え、ヘッドセットを装着すると早速キャラメイクが始まった。

髪型や顔立ちはもちろん、身長、体型——それこそ女性キャラであれば胸のカップサイズまで自由自在だ。

(……巨乳タイプにしてみるか)

せっかक्तつくるなら、と男受けしそうな顔立ちに長めの黒髪。少し小柄で、それでいてFカップの柔らかかそうな胸。ウエストはきゅっと

くびれて、太ももはむっちり。

コスチュームはデフォルトの中にあつた制服にしてみた。

いわゆる、えっちな身体つきをしているけれど清楚系な美少女が完成した。

最後に「サクラ」と名前入力をして――。

「……よし。完璧」

確認ボタンを押すと、視界が真っ白に染まる。

深い眠りの底から、ぬるりと引き上げられるような感覚に似ていた。視界がゆっくりと開けていく。

「ん……っ」

そこには知っているけど見慣れない光景が広がっていた。

天井の蛍光灯、つり革、人混み——電車内だ。

ガタンガタン、と電車の揺れる振動と音までVRとは思えないほど、細部まで作り込まれている。人いきれすら感じるほどだ。

「……すげ」

声を発して、サクはすぐにはっとした。

自分の口から出た声は間違いなく女の声。

「マジで——ううん。ホントに現実みたい」

（うっわ！ 女の子っぽい！）

自分の声に、感動してしまう。

サクは——いや、サクらはふと自分の身体を見下ろしてみた。
足が細い。手首も華奢で、白くて柔らかそうな肌。首をかしげると、
ふわりと髪が揺れる。サラサラの長い黒髪。

そして——。

(重っ……)

制服のシャツ越しに感じる、ふたつの柔らかい重み。

キャラメイクで設定した『美少女』

その姿が、まさしく今、自分の感覚とひとつになっていた。

「……………」

戸惑いと同時に、背筋がじわりと熱を帯びる。

こわごと、自分の胸に手を伸ばしてみる。

(さ、触ってみるだけ……)

制服の上から、そっと指先で押してみる。

むにゅ。

反発と沈み、形が変わるリアルな感触。

「っ……う、うそ」

もう片方の手でも、包み込むように柔らかな膨らみを揉んでみる。

(うわ……すげ……ちゃんと中の脂肪が動く……っ。しかも、気持ちいい……?)

ゾクゾクツ♥と背筋を走る刺激に、思わず息を飲む。

(やべえ……この感覚、完全に女？　つか、エロい……)
しばしサクラは夢中になって自分の胸をいじっていた、と、そのときだ。

ふと、背後から押し当てられるような硬い感触。

「…………え？」

おしりに、なにかが当たっている。

電車の揺れとともに、それがじわじわと擦れるように動いた。

(この感触は……。誰かの……?)

思わず振り向こうとするが、身体がうまく動かない。

〈チュートリアル開始〉

——そんな表示が脳内にちらりと浮かぶ。

(えっ、ちよっ……これ、もう始まってんの……!?)

おしりに当たる異物の存在を意識した瞬間、肌がゾワリと粟立った。思わず動こうとするが、脚がすくんだように動かない。

腕すら自由にならず、まるで「囚われている」ような状態だ。

(うわ……こ、これ、ヤバくね？　っていうか——)

さわ……
♥

スカートの上から、ゆっくりと手のひらが撫でてくる。

布越しに伝わる男の手の熱。まるで本物みたいに、じんじんと皮膚

の奥に染みこんできた。

「あ……っ」

自分の口から、か細くて甘い声が漏れた。

まったく意図していないのに、喉が勝手に震える。

(なんだ、これ……。やばい……っ)

おしりを包むように、男の手がじわじわと動く。

電車の揺れに合わせて、布が擦れる音が聞こえた。

(うそ、だろ？ 尻、触られてるだけなのに……ッ!?)

スカートの上からおしりの谷間をなぞるように、指がするすると上
下している。

ぞくぞく♥とサクラの背筋が震えた。

「んっ……あ、はあっ……」

(やば、声……っ)

たまらずサクラの口から甘い吐息が漏れた。

「……っ、ふ……っうっ♥」

息が上がり、身体にじんわりと熱がこもる。

おしりを這う指は、まるで生き物のようにスカートの上からいやらしく動き回っていた。

(やば……っ。これ、マジで……っ)

「んん……っ」

口からこぼれる声は紛れもなく女の声で、その声にすらサクラの中のサクの部分に興奮する。

「う、んん……っ♡や、だっ……」

「ふふ……」

ふいに、背後から柔らかな吐息が耳元に触れた。

「君、すごくやらしいカラダしてるね♡」

低い、男の声。それが脳に響くように伝わってくる。

ゾワツと背筋が震えた。

（――ゲーム。これは、ゲームだ。チュートリアル！）

そう思おうとしても、サクラの手足は言うことを聞いてくれなかった。

スカート越しに、おしりを這う手のひら。すこしずつ、すこしずつ中心へと指が近づいてくる。

「んあっ……♡」

(ダメ……だろ、これ……)

この身体はあまりに敏感で、少し撫でられるだけで呼吸が乱れる。

くちびるが自然と開いて、熱を帯びた息が漏れた。

目の前の光景は電車。誰も自分たちのことなど気にとめない、日常の風景を保ったまま。

でも、自分の身体の中だけが、まったく別の世界になっていた。

さっきまで胸を揉んでいた指を思い出す。あのときの柔らかさ、温かさ、そしてなにより、あの背筋を走った快感。

今、別の場所が同じように反応している。

(やばい、やばい……っ)

ふわり、とスカートの後ろが捲られた。

男の手は、今度は両手でショーツ越しに尻肉をぐにっ♡と驚掴みにしてきた。

「ひ……♡」

ぞくん♡——と、脳の奥がしびれた。

指がおしりの中心——ちょうどおしりの穴のあたりに押し込まれる。

「っ、やあっ……♡」

音に出すつもりなんてなかった。けど、声は自然と口を突いて出た。電車の揺れが、ふたりの身体を微妙に擦り合わせる。

ぐにぐに♡とおしりが揉みしだかれる。時折左右に開かれるように

広げられると、身体の中心からくちゅ♡と濡れた音がした。

「や、だ……っ♡やめ、て……」

サクラはわずかに身をよじらせた、しかし、それなりに混み合っている車内。身動きはほとんどとれず、男の手はぴったりとおしりに張り付いたままだ。

(やば……っ)

足の付け根が熱い。それだけではない。さっきからずっとゾクゾクするような刺激で、腰から下が痺れている。

ショーツに覆われた秘部の奥は、おそろくじっとり濡れている。それがサクラ自身にもわかった。

「っ、ん、ふ……っ♡」

(あ。これ、マズい……)

サクラはぎゅっと目をつぶった。

自分の意思とは関係なく、腰が勝手に動き始める。まるで男を誘うように、くねくねといやらしく揺れるのだ。

「あれ？ 腰、動いちゃってるね♥」

男は小さく笑いを零すと、おしりを揉んでいた手を前へと移動させた。

ショーツ越しに感じる、男の手の温度と硬さ。そしてなによりもリアルな感触に思わず背筋が震える。

(う、わ……♥そこは……っ♥)

男の手は、サクラの太ももをなぞるように滑り落ち、やがてショー

ツの上から割れ目をすりすり♥となぞり始めた。

「やっ、そこ……っ♥」

すりすりすり♥すりすりすりすり♥

びくんつと腰が跳ねた。太ももがきゅつと内側にすぼまる。

（尻と全然ちがう！）

まるで火がついたみたい、奥がじんじんと疼いて止まらない。

どくどく♥と鼓動のたびに、身体の内側がなにかを欲しがって震えている。

「すごいね……パンツにぬるぬるが染みてきちちゃってる♥」

「ちがっ……♡あっ♡」

すりすりすりすり♡なでなでなで♡

電車の中。誰かが見ているかもしれない。聞かれているかもしれない。

なのに、脚の間を弄られて、声を抑えられない。

（思ってた以上に、きもち、いい……っ！）

サクラはぎゅっと目を瞑って、身を固くしていた。けれど、足のつけ根から這い上がってくる快感はどんどん深くなっていく。

やがて男の指は、薄布越しに敏感なそれを見つける。

こり……♡

「あぁっ……♡ひ、んっ♡」
クリトリスだ。

ショーツの上から、クリトリスの表面を、優しく優しく撫でるように、男の指が動く。

すりすりすりすりすり♡

「あ、は……っ♡あ……♡」

一瞬のうちに脳内が真っ白になった。

思考が弾け飛ぶような快感とともに、サクラはがくがくと腰を揺する。おしりの穴まできゅんと疼くのがわかった。

「へえ……君、すごく敏感だね♥」

男は嬉しそうに言う、ショーツのクロッチをずらした。そして、直接クリトリスに指が触れた。

「ひあっ♥あ……♥あ、あ、あっ♥」

くちゆくちゅ♥と水音がした。男の指は溢れた愛液をクリトリスに塗りたくるようにしてぬるぬると動かす。

「やあっ……ん♥あ、ああっ♥」

声を抑えられない。サクラは口元を押さえて首を振った。

(だめ、だ……っ♥これ、良すぎ、る……っ！)
もう限界だった。

身体の奥から熱いなにかがこみ上げてくる。

(やば、い……っ♥)

「あ、あっ♥あああっ♥」

びくんっ♥と大きく身体が跳ねた。

脚ががくがくと震える。

サクラはぎゅつと目をつぶって、その快感を受け止めた。

(イッた……?)

思考がまだぼやけている。けれど、脳の奥から下腹部までを満たしていたうねりが収まり、代わりにどっと疲労が押し寄せてきた。

ふと我に返って、視線を彷徨させたとき——その場にいた乗客たちが、みんなこっちを見ていたのだ。

「——っ！」

全身が硬直し、ぶわっ♥と一気に体温が上がる。

目が合ったのは、スーツ姿のサラリーマンたちだ。

誰もがサクラを見ていた。

顔だけじゃない。胸の奥、腰のあたり、さつきイカされたその場所までが熱い。

恥ずかしい——はずなのに。

(……見られてた……っ)

その事実が、また別の興奮となって背筋を這い上がってきた。

恥じらいに頬を染めながらも、心のどこかでゾクゾクと疼く。
まるでこの姿を、誰かに「見せつけたかった」かのよう。

——チュートリアル終了。データ保存完了♥おつかれさまでした♥

ふいに、耳元に女性のアナウンスが流れた。

——サクラの「体験」は、まだ始まったばかりだった。



「……………は……………あ……………っ」

ゴト、と鈍い音を立てて、サクはVRゴーグルを外した。

室内の暗さに一瞬目が慣れず、視界がぼやける。

見慣れた部屋。散らかった机。モニターに映るゲームのロゴ画面。

ようやく現実に戻ってきたことを実感すると、サクは深く息を吐いた。

(やば……マジで……ヤバかった)

さっきまでの快感が、まだ尾を引いていた。

現実の身体は男のはずなのに、心と脳がまだ女の子のまま引きずられている。

脚のあいだの違和感、腰の奥がじわじわ疼くような感覚すら残っている気がして――。

(……女って、……あんな、すごいのか……)

ぶわっと再び顔が熱くなり、両手で額をおさえる。

「これ買って、ほんつとによかったあ……」

声に出して、思わず笑ってしまった。

もともとは興味本位だった。SNSでバズっていた女体化VRがどういうものなのか、知りたいだけだったのに――。

いざやってみたら、想像以上のリアルさと快感。

脳まで痺れるような「性感」は、現実の行為なんて比にならない。

(あんなの……クセになるに決まってる……っ)

サクは汗ばんだ手でマウスを握り直し、画面を操作する。

ログイン画面の下には、新しいモード選択が表示されていた。

【チュートリアル終了。以降は任意のシナリオを選択可能です】

【おすすめ・初心者向けの《ライト》刺激重視の《ハード》】

【特別解放中…とことんモード（羞恥・快楽・リピート制限なし）】

「へえ……とことんモード、ね」

サクはつい、口角を上げた。

（どうせなら……一番ヤバイやつ、いっとくか）

カチ……。

モード選択が完了し、画面が次第に黒く染まっていく。

【選択完了…とことんモード（深夜電車編）】

『とことんモードは途中終了ができません。ごゆっくり、お楽しみください♡』

ヘッドセットから女性のアナウンスが流れる。

次の瞬間、視界が再び闇に包まれた――。



——がたん、ごとん。

暗闇の中、耳に届いてきたのは、どこか懐かしい電車の揺れる音。次第に視界が明るくなると、目の前には窓ガラスに映る女の子がいた。

サクラ、だ。

窓の外は夜。車内に乗客の姿はほとんどなかった。

(塾帰りとかバイト帰りの感じ、か……)

なんて自分なりの設定を考えてみたりする。

「こんな遅くに一人なんて危ないなあ……」

唐突に背後から男の声が聞こえた。

「え……?」

振り返るより早く、後ろから胸を鷲掴みされる。

(……とことんモード、ってこういう……)

サクは、ほんの少しだけ軽い気持ちで選んだはずだった。

誰にも邪魔されず、徹底的に快感を味わわせてくれる。という、ゲーム内の説明。

しかし、いざ始まってみると――。

「や……♡あ……♡」

男は慣れた手つきでサクラの胸を揉みしだきはじめた。

たったそれだけで、お腹の奥がきゅん♡と疼くのがわかった。

(やばい……♡おっぱい、めちゃくちゃ気持ちいい……♡！ 自分

で揉むのと全然違う。まんこの奥がじんじんして……♡)

「んんっ……♡や、だ……あっ♡」

思わず喉が反る。と、窓に映る自分の顔がサクラの目に映った。

頬を赤く染め、目はとろけた表情。口元にはゆるく開き、赤い舌がのぞいている。

清楚で可愛い顔が淫靡に歪んでいた。

(俺の顔、えっろ……♡)

羞恥の感情を煽られる。それにすらひどく興奮した。

「君、おっぱい大きいね♡」

耳元で男が囁いたかと思うと、制服のシャツに指がかかる。

ぷち、ぷち——とボタンをひとつひとつ外していく音が、やけに大きく聞こえた。

「や……やだ、見ないで……っ」

そう口では言いながらも、サクラの身体は素直に震えていた。

ボタンがすべて外され、胸元を開かれる。

繊細なレース使いのブラは水色。

男の手がブラのカップを引き下げる。ぷるん♥と弾けるように大きな乳房がまろび出た。

柔らかな肉が、車内の冷たい空気に震えた。

「えっちなおっぱいだ♥おつきいけど、乳首は小ぶりでピンク色♥可愛いね♥」

男はそのまま乳房を中央に寄せるようにして、重なり合いそうになった乳首をコリコリ♥と擦り合わせる。

「ひっ♥あ、あんっ♥や、だあっ♥それ、だめえっ♥」

乳首からビリビリと電流みたいな快感が流れてくる。

「うん？　だめ、じゃないよね？　だってこんなに乳首ビンビンにしてさ♥気持ちいいんでしょ？」

男はサクラの乳首を人差し指でぴしぴしと弾く。それから今度は親指と人差し指でつまみ、コリコリ♥と擦り合わせた。

「あああっ♥や、あっ♥ちくびっ♥きもちいっ……♥」

乳首が、ぷくつと硬くなっていくのがわかった。

つままれ、転がされ、こすられるたびに、お腹の奥がじんじんと熱を持っていく。

（すっげ……♥乳首だけで……イッチャいそう……♥）

下半身は何も触れられていないのに、すでに股間はぐしよ濡れだった。

「声、もつと出しても平気だよ？ 誰もいないから」

男は優しく囁きながら、両方の乳首をきゅっ♡と摘んで、くりくり♡と捻りながら引っ張った。

「んんんっ♡あっ♡だ、めえっ♡それ、おかしくなっちゃうっ♡」
腰が勝手に揺れる。

制服のまま、乳を丸出しにして、電車の中でイカされかけている――その状況に、羞恥と興奮が止まらない。

「う、あ……♡」

窓に映った自分の姿が目に入り、サクラはびくびくと身体を震わせ

た。

だらしなく蕩けた顔をして、男の指に胸を突き出して、もつと弄つてくれとねだるように腰を振っている。

「あ、やあっ♡ちくび、きもちいっ♡」

身体が弾むたびに、豊かな乳房もいやらしくふるふる♡と揺れていた。

「ん、あ……っ♡やあっ♡いつ、イツちやうっ……♡」

「イツちやうの？ いいよ、ほら♡ほら♡乳首でイツちやえ♡」

男は両方の乳首をきゅーっ♡と引っ張りながら、くにくにっ♡と押し潰した。

「やああっ♡ちくび、ひっぱらない、れえ……ッ♡イクっ♡いっちや

ううっ♡」

サクラはびくん♡と身体を跳ねさせ、絶頂した。

「あ……ああ……♡」

がくがくと脚が震え、立ってられないほど膝から力が抜ける。

へなへたと床に崩れ落ちそうになったときだった。

「おっと……危ない……」

腰に腕を回され、ぐいっと抱き寄せられる。

男の体温が、じんわりと身体に染み込んでくるようだった。

「ほら、足……もうちよつとだけ、開いて」

そう囁かれたサクラは、一瞬だけ戸惑った。けれど、拒むよりも先に、身体が勝手に動いていた。

脚が、ゆっくりと開かれる。

「うん、いい子。そんな感じ」

男の手がスカートの奥へと潜り込み、ショーツの上から中心をなぞる。

指の腹がクリトリスをすりすり♥と軽く擦った。

「んうっ♥あっ♥ああっ……♥」

サクラは背筋をぐんつと反らせて、甘い声を上げた。

「や、あ、ああっ♥」

すりすりすり♥　くにつ♥

指先が円を描くようにクリトリスを撫で、時折、思い出したように押しつぶす。

「あっ♥あう……んっ♥」

男の手つきは巧みだった。

激しい動きというわけではなく、的確に気持ちいい部分を刺激してくるのだ。

（やべ……♥こんなん、すぐイッちまう……っ♥）

「も、だめえっ♥いくっ♥いっちや……っ♥」

「いいよ？」

ショーツが愛液でぬめり、そこを擦られるものだから、粘着質な水音が響く。

クリトリスはさらに硬くなり、コリコリ♥と芯を持ち始めていた。
(うあ♥クリ、気持ちいい、気持ちいい♥)

男の指の動きに合わせるように、サクラの腰がカクカク♥と揺れた。

「あ、あぁっ♥い、くっ……♥」

びくんっ♥と大きく身体が跳ねた。

「ん、あ♥あぁっ……♥あ、はぁ……ッ♥」

全身を包み込むような快楽がじんわりと広がる。

(うわ……っ♥すっげえ気持ちいい……♥)

心地よい満足感に身を委ねていると、ふと、スカートの奥へと入り込んだ手が、さらにその下へと進んできた。

ショーツをずらし、ぐしよ濡れになった陰唇が開かれる。

ぬちゅ♥といやらしい音がした。

「え、あ、待って……！」

達したばかりで敏感になりすぎているクリトリスが、今度は直接接触られる。

「おあっ♥だめっ♥いま、そこ触られたら……っ♥」

「気持ちよくなっちゃう？」

男は小さく笑いを零すと、容赦なくクリトリスを二本の指で挟み込んだ。

「ひっ♥」

そのまま、にゅこにゅこ♥と包皮ごと扱き始める。

快感と呼ぶには乱暴すぎる刺激が、サクラの脳をびりびりと痺れさ

せた。

「あっ♥あっ♥ら、め……えッ♥」

視界がバチバチと明滅する。

クリトリスから全身へと広がる快楽が、まるで波のように何度も打ち寄せてきた。

くりくり♥くにくに♥と指先で転がされ、根元から扱かれる。

(やばい……ッ！)

「びくっ♥♥またイツちやううつ♥~~~~♥♥♥」

ぴゅっ♥と秘裂の間から液体が吹き出す。

「あ、あ……あ……♥」

がくがくと膝が震えた。

(やば……♥まじ、頭おかしくなる。ちよ、一回、休憩……っ)

サクはメニユーの中からセーブを探すが見つからない。

(え？　なんで？　——……あ！)

戸惑うものの、すぐに思い出す。

開始するときに「途中終了ができません」とアナウンスがあったことを。

(や、ば……終了ってどこまでいったら終わりなんだよ……っ!?)

「終点までまだ時間はたっぷりあるから、たくさん気持ちよくなるからね」

窓ガラス越しに嬉しそうに笑う男と目があった。

(うそ、だろ……)

「ひうっ!?♥」

男の指先が、つぶ……と膣内に入り込む。

「あっ♥や、ら、まっれ……! いま、イッたばっか……」

「うん、知ってるよ」

ゆっくりと、指が奥へと埋め込まれていく。

「んがあっ♥」

サクラの膣内はぐしよ濡れになっていたせいか、男の指を抵抗なく受け入れた。

「や、ああっ♥あっ♥」

（う、わっ♥挿入って、きてるっ……♥）

じゅぷぷ♥と挿入された指がくいと曲げられる。

「おっ!? ♥♥♥」

意識せず、びくん♥と腰が跳ね上がった。

(な……っ!? これ……ッ!?)

身体が跳ねるたび、脚の間からぴゅっぴゅっ♥と液体が飛び散って床を汚した。

「潮まで吹いて、すごく敏感さんなんだね」

「おあっ♥やっ♥んあっ♥なかつ、ぐりぐりってえ……っ♥」

お腹の裏側を押し上げるような指の動きに、目の前がチカチカする。

じゅぷっ♥　じゅぷじゅぷじゅぷじゅぷっ♥

(やばい、やばいっ♡クリイキしたばかりの敏感まんこ、めちやくちやにされてる……っ♡)

「ひっ♡あっ♡ああっ♡やあっ♡また……っ♡」

男の指は止まらない。サクラの弱いところばかりを的確に、執拗に責め立ててくる。

サクラはもはや自力では立っていられず、ほとんど背後の男に背中からもたれかかっていた。

「や、あっ♡も、らめ……えっ♡」

(やばい……っ♡またイカされる……ッ！　こんな簡単に……っ！)
ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡と激しく膣内をかき回されながらクリトリ
スを扱かれれば、もう我慢なんてできなかつた。

「いぐっ♥いぐいぐいぐっ♥あ、あぁっ♥んあぁぁっ♥」

サクラが達するのと同時、男が指を引き抜いた。

直後、じよぽっ♥と股間から勢いよくしぶきが上がった。

「あぁっ♥見ないで、え……っ♥」

尿なのか潮なのかわからない液体が、じよろじよろ♥と音を立てて床にこぼれ落ちる。

「あ、あぁ……♥」

サクラは呆然とその光景を眺めていた。

「派手におもらししちゃったね♥可愛いなあ……♥びしょびしょパンツは脱いじゃおうか♥」

男が優しく声をかけながら、サクラを座席に座らせると、シヨーツ

を脱がし床に落としたり。

(な、んだこれ……。俺、こんな簡単にイカされちゃって……)

床に落ちた水色のショーツをぼんやりと見つめたまま、サクラは浅い呼吸を繰り返した。

これはあくまで体験型のゲームだ。現実じゃない。そう、頭の片隅では理解しているはずなのに、身体が言うことをきかない。

(まだまんこじんじんする……。っ♥)

男にされるがまま、サクラは座席の上で大きく足を開かされた。

M字に開かれた脚の間に、男が顔を近づける。

(え、あ、これって、もしかして……!)

まさかと思うも、次の瞬間にサクラは身体を強張らせた。

ぬろおっ♥と舌先が割れ目をなぞる。

「あっ、ひっ♥あんっ♥」

ちゆる♥ぢゅっ♥れろお……っ♥

肉厚な舌が何度も割れ目を往復する。

(わ……♥これ……っ♥気持ちいい……っ♥)

「んああっ♥あっ♥あっ♥」

「おまんことろとろで、吸っても吸っても溢れてくるよ。クリもこんなに勃起させちゃって、舐めてーっしててみたいだね」

男が舌を動かすたび、ちゆるっ♥ちゅぱっ♥といやらしい水音が響

く。

「んあっ♥ああっ♥それ、きもちいっ♥まんこ舐められるの、気持ちいいよお……っ♥」

男の舌先がべろべろとクリトリスを弾くように動く。そのたびに、甘い痺れが全身に走った。

「あっ！ あ、あっ♥い、いっちゃ……♥それ、いっちゃうっ♥」

ぶるっ♥と身体が震え、頭が真っ白になった。

「んんん……ッ♥♥♥」

（あゝ♥まんこ舐められて、またイカされた……っ♥も、無理。イキたくない……っ！）

頭の中が焼き切れそうだった。何も考えられないくらいの快楽の奔

流に飲み込まれていく。

「あ、ああっ♥やあっ♥」

男の舌が膣口へと侵入し、ちゅぽちゅぽ♥と出し入れされる。

(あ……っ♥舌、入ってる……っ♥)

「んっ、あ、あっ♥あ、ああっ♥」

膣内の浅いところを何度も擦られるたび、サクラは身体を跳ねさせた。

じゅぽっ♥れろお……っ♥ぬぷっ♥

(もう、どこもかしこも、気持ちよすぎて……♥)

続けざまの絶頂に視界が霞んでくる。

「おまんこヒクヒクしてる♥そろそろ欲しいのかな？」

「ん、え……？」

サクラは朦朧とする意識の中で男を見上げた。

男がゆっくりとストラックスの前をくつろげていく。

(え、ちよ……？これって、そこまですんのかよ……？)

焦るサクラをよそに、男はファスナーを下ろしていく。

ぶるんっ♥と飛び出した太く長い陰茎は天に向かって反り勃っ

た。

「ひっ……」

サクラは思わず小さく悲鳴を上げた。

勃起したそれは、サクラが想像していたよりも遥かに大きいものだったのだ。

(指であんなだったのに、そんなの挿入れられたら……っ！)
想像するだけでぞっとしてしまう。

固まったサクラの両脚を男が持ち上げる。

「ちよ……っ、待って……！」

言葉だけの抵抗など無意味だった。

濡れそぼった割れ目に陰茎が押し当てられる。

じゅぷ♥とまず亀頭が沈む、それだけでサクラはたまらず背をしな
らせた。

(あ、すご……♥ちんぽ、挿入ってくるう……っ♥)

「すごいね、中が吸い付いてくるよ」

男が恍惚とつぶやき、ぐっと腰を突き出してきた。

じゅぷんっ！♡

「んあああっ♡♡♡」

中を満たす圧倒的な質量。奥まで一気に貫かれ、サクラは悲鳴にも似た声で喘いだ。

（なんだ、この感覚っ!? まんこ、えぐられて……っ♡）
大きな亀頭が、ごりごり♡と膣壁をこすり上げる。

「あっ♡ああっ♡♡や、ああ……っ♡」

ただそれだけでサクラは軽く達してしまった。びくびくつと腰が跳ね上がる。

じゅぷっ♥じゅぷんっ♥ぐちゅっ♥

男が挿挿を始めると、そのたびに結合部からは耳を塞ぎたくなるような水音が響いた。

「んあっ♥あっ、あっ、ああっ♥」

(ちんぽっ♥ちんぽっ、これ、すごいっ♥♥♥)

男の陰茎が膣内を行き来するたび、サクラの視界がぱちぱちと弾ける。

がたんがたん、と揺れる電車の音がどこか遠くに聞こえていた。

「ん、ああっ♥や、ああっ♥」

「はあ……すごいな。おまんこがきゆうきゆう締め付けてくるよ」
男がサクラの両脚を大きく開かせたまま、覆いかぶさってくる。

最奥まで突かれる角度が変わり、先ほどよりもさらに深いところまで陰茎が届いた気がした。

（あっ♥これ……っ♥当たっちゃ、いけないところ……！ 子宮口、届いて……っ！）

「んがおっ♥おおっ♥やああっ♥」

「はは……すごい声だね」

「ああっ♥らってえ……♥ちんぽ、奥まできてるうっ♥」

もうゲームだとか現実だとか、そんなことどうでもよくなっていた。ただただ気持ちいい。もっと気持ちよくなりたい。それしか考えられなくなっていた。

じゅぷ♥ずぷっ♥ぬちゅっ♥ぐぽっ♥

「あ、ああ……♥いいっ♥あっ、ああっ♥」

肉と肉がぶつかり合うたび、頭の中で火花が飛び散る。

男の陰茎が、ずるるう〜♥と引き抜かれたかと思えば、勢いよく奥を穿った。

「あっ♥んおほおっ♥」

(やばい……っ♥これ、まじで気持ちいい……っ！)

挿入のスピードが徐々に上がっていく。

「おほあっ♥ああっ♥いぐっ♥またイグうっ♥♥♥」

頭が真っ白になるほどの快楽に全身を支配されながら、サクラはびくんびくん♥と痙攣を繰り返した。

「中に出すよ……っ」

男が切羽詰まった声で囁く。

「ひ、あっ♥あ、あっ、あっ♥」

返事もままならないサクラのことなどお構いなしに、男は腰を打ちつけ始めた。

どちゅんっ♥ぱちゅっ♥ぱちゅんっ♥ごりゅっ♥

「んおっ♥あぁっ♥いぐ♥いぐいぐッ♥」

子宮口に龟头がごちゅ♥と沈む。

ぴったりと密着したまま男が射精した。

びゅるっ♥と大量の精液が放たれていく。

(あ、あっ♥出されてるっ♥中出しされてるう……っ♥)

身体の中で、男の陰茎がどくどく♥と脈打っている。

「はあ、はあ、はあ……♥」

やがて長い射精が終わると、男はずるり♥と陰茎を引き抜いた。

直後、視界が白く染まった。

『データ保存中です♥おつかれさまでした♥』

チュートリアルの時と同じように、テキストの表示とアナウンスが流れる。

「……………っはぁ」

息をするのを忘れていたような、そんな心地だった。

サクは大きく息を吐くと、ヘッドギアをはずした。

(こんなん知っちゃったらもう……)

サクは無意識のうちに自分の下腹部を撫でた。

ないはずの器官が疼いている。

感覚だけは、いまだ鮮明なままだった。



それからというもののサクはすっかり『トレインプレイ』にハマってしまった。

そんなある日、限定シナリオが配信されるということで、サクは帰

つてくるなりすぐにソフトを起動させた。

『限定シナリオ・集団痴漢編』

対象年齢・成人向け

概要・都会の通勤通学路線。満員電車の中で男たちが集団で痴漢行為を行う。最初は恐怖に怯える主人公だが、やがて快楽に溺れていく……。

「へえ……」

説明文を一通り読み、サクはごくりと喉を鳴らした。

(こんなん、絶対やばいって……)

しかし、一度火がついた興味と興奮はなかなか抑えられるものではなかった。

「まあ、でも……ゲームなんだし……」

そのゲームに毎回翻弄されている事実を自覚しつつも、あえてそう口にする。

サクは早速『限定シナリオ』を選択したのだった。



『まもなく電車が発車します……』

アナウンスとともにホームに滑り込んできた電車は、いつもと同じ

通勤通学路線のものようだった。

サクラは電車に乗り込むと、ちらりと周囲を確認した。

(集団ってことは、周りにいる人のほとんどは、それってことなのか
な……?)

混み合った車両内で、サクラはドア付近に陣取り、手すりを掴んだ。
ガタンゴトン、と電車が動き出す。

違和感はすぐに訪れた。

誰かが脇腹のあたりを、すすすす♥と撫でてきたのである。

「っ!？」

思わず声を上げそうになったが、すんでのところで堪えた。

(わっ! きた!)

その手つきはいやらしく、明らかに性的な意図を孕んでいた。

「あ……」

今度は別の手が太ももに添えられる。

さわさわ♥と優しく撫でられる感覚に、背筋がぞくりとする。

どちらの手もだんだん大胆になっていき、片方は胸の上へ、もう片方はスカートの中へと侵入してきた。

(こういうのって、たとえば抵抗とかしたらどうなるんだ……?)

「あ、あの……」

サクラはと背後の一人を振り返ろうとした。しかし、そこをまた別の誰かに腕を掴まれ拘束される。

「あっ……」

二人だけではない。

(や、やばい……。囲まれてる……)

シナリオの内容はわかっていとはいえ、実際にその局面に立たされると少なからず恐怖に似た感情が沸き起こった。

サクラは万歳するような形で両手を拘束され、ドアに体を押し付ける体勢を取らされる。

一人の手が無遠慮に胸をまさぐってきた。

「……んっ！」

豊かな乳房がぐにぐに♥と好き勝手に揉みしだかれる。

「やっ……」

男の手が上下左右に動くたび、柔らかな乳肉がむにむに♥と歪に形

を変えた。

(おっぱいが歪んでる………♥)

サクラは徐々にぼんやりしてくる意識の中で、乱暴に揉まれる自分の胸を見下ろしていた。

「ひっ♥や、あ………♥」

と、ふいに男の手が制服のシャツのボタンを外しにかかる。ぷち、ぷちと一つずつ外されていくたび、サクラの鼓動は早まっていく。

(あ………っ)

シャツが左右に大きく開かれ、レース付きのピンクのブラジャーに包まれた胸が露になった。

白くてふっくらとした乳房は、ぬるい空気に晒されふると震えて

いる。

「や……」

サクラが羞恥で顔を赤らめるより早く、背後から伸びてきた手によってブラもずり上げられてしまう。

ぷっくりとした乳首が剥き出しになった。

周囲の男たちが下品に喉を鳴らす音が聞こえた。

（見られてる……！！ 視線が……！！）

「や……っ」

サクラは身をよじるが、両手は変わらず掴まれたままだ。

「んあっ♥」

男の手が乳房を絞るように揉み込んでくる。指先がきゅっ♥と乳首

をつまみ上げた。

「あ、ああっ♥」

そのままコリコリ♥と弄られる。強い刺激に咄嗟に声上がる。

近くの男たちが、食い入るようにこちらを見つめているのが嫌でもわかった。

「ん……っ♥あんっ♥」

（おっぱいが、乳首が、あんな形変えて……っ♥）

コリコリ♥と乳首が捏ねられながら中央に寄せられる。白い乳肉に指が食い込み、深い谷間ができていた。

「あ、あっ♥あ、んっ♥」

人差し指と親指が乳首を扱き上げる。

かわいいそうに思えるくらい乳首が潰され、そのたびにぞくぞく♥と甘い痺れが走った。

「んんっ♥ あ、あ、あっ♥」

乳首はすっかり芯を持ち、ぷっくりと膨れ上がる。

「あ、ああ……っ♥」

両方の乳首を同時に責められるたび、サクラの体はビクビク♥震えた。

しかし、それだけで終わるはずもない。

別の男の手がスカートのサイドのホックを外した。

ストーン、と足元にスカートが落ちる。

「パンツ丸見えだね〜♥」

「ひ……っ♡」

何人かの男の手が太ももを撫で始める。今、何人の男が自分の身体に触れているのかもわからなかった。

やがてひとりが出着の上から恥丘を撫でてくる。

「ああっ♡あふ、う……っ♡うう……っ♡」

く♡と肉襞を指で押し込まれた。その間も別の男の乳首への刺激は止まらない。

こり、こり♡と指の腹で扱かれるたび、甘い快感が生まれた。

「乳首、コリコリだね♡」

「あんっ♡いや、やめ……っ♡」

「パンツの上からでもわかるよ？ここ、勃起してるよね？おまんこも

くちゆくちゆいってるし」

「ち、ちがつ………！ ああっ♡」

男が中指でゆっくり、ゆっくりと割れ目をなぞる。

すりすり♡すりすりすりすり♡

指が前の方にくると、肉の隙間から少しだけ顔を出したクリトリスをかすめ、ぞわっ♡とした快感が走った。

「太ももすべすべだね♡」

「俺は脇フェチなんだ。舐めていい？」

「ああん………っ♡ひ、あっ………♡」

たくさんの手が太ももを撫で回す。

誰かが脇の下に顔を埋めてくる。

次から次へと訪れる、快楽と羞恥にくらくらしてきた。

「乳首が吸って吸って♥っておねだりしてるよ。可愛いね」

「や、やあ……っ♥あ、ああっ♥」

スーツ姿の男の一人が別の男に揉みしだかれている最中の乳房に顔を近づけた。

ためらいなく、ちゅうっ♥と乳首に吸いつかれる。

「ひああっ♥」

生温かい口内で乳首を転がされ、サクラは思わずのけぞった。

「じゃあ、俺はこっち♥」

別の男が反対側の乳首をぱくり♥と加えた。そのまま、ちゅぽっ♥
ちゅぽっ♥と何度も吸い付かれ、舌尖でちろちろとくすぐられる。

両方の乳首がそれぞれ吸われ、口の中で舌が小刻みに動いている。

「あ、あ、ああ♥んんっ♥や、だめ、きもちい…っ♥」

ぬるぬるとした感触がたまらないくらい気持ちいい。

同時にじゅうううっ♥と強く吸われると腰から力が抜けていきそうになる。

「んっ♥んは♥やめ、やめへっ…っ♥」

二人の男に乳首を同時に舐められ、甘噛みされ、サクラは下腹部に熱が溜まっていくのを感じていた。